

兵庫県 伊丹市



<市章>

◆市の概要（平成 27 年 4 月 1 日現在）

- 面積：25.09 km²
- 人口：197,376 人
- 世帯数：79,536 世帯
- 平成 27 年度一般会計当初予算：692 億円

兵庫県の南部に位置する伊丹市は、神戸市から約 20 km、大阪市から約 10 km の圏内にあり、尼崎市、西宮市、宝塚市、川西市、大阪府池田市と豊中市に囲まれた内陸の市です。新石器時代にはすでに開けていたといわれますが、奈良時代には摂津地方の仏教文化の中心として栄え、中世以降は都の貴族や大社寺の荘園となり、その後に伊丹氏が台頭して摂津地方の有力大名となり伊丹城を築きました。

江戸時代前期には、京都の公家で五摂政筆頭の近衛家の領地となりました。近衛家は清酒造りを保護・育成したため、伊丹は「清酒発祥の地」となり、その周辺農村でも清酒業に関連した産業が盛んになりました。また、豊かな経済力を背景に豊かな俳諧文化が華開いた地でもあります。

明治時代の廃藩置県で兵庫県に編入された後、いく度かの合併を経て、現在の市域となり、平成 22 年には市制 70 周年を迎えました。

明治 24 年の川辺馬車鉄道（現 JR 福知山線）および大正 9 年の阪急伊丹線の開通以降は、伊丹市は大阪大都市圏の住宅都市としての発展を遂げています。また一方で、県道尼崎池田線（産業道路）の開通は沿道への大規模工場の建設を促進し、市内には伊丹空港（大阪国際空港）があり、また大都市圏内でありながら毎年多くの渡り鳥が飛来する関西屈指の野鳥の楽園ともなっています。

（1）伊丹っ子ルールブックの作成・活用について

伊丹市教育委員会は、伊丹の小中学生に身に付けさせたい社会のルールやマナーをまとめた副読本「伊丹っ子ルールブック」を作成、平成 22 年度末に全児童に配布して授業などで活用しています。

子どもたちの発達段階に応じた内容とするため、小学校低学年編「39（サンキュー）ルール」、同高学年編「33 の約束」、中学生編「毎日の約束カレンダー」の 3 種類を作成。副題は「ならぬことはならぬものです」としました。

・学校数

市立小学校	17 校
市立中学校	8 校
市立特別支援学校	1 校
市立高等学校	1 校
市立幼稚園	16 園
市立子供園	1 園

児童・生徒数 約 1700 人 / 1 学年

・ルールブックの作成

作成のきっかけは、市内で起きた平成 21 年に中学生が上級生から集団暴行を受け死亡した事件にあります。

事件後、これから子ども達にどのようなことを教えて行かなければならないかと考えた時に、人としての生き方、人間としてのかかわり方、社会のルールなど、これらを大人はもう知っているつ

もりでいたが、子ども達にはひとつひとつ教えて行かなければならないのではないか、規範意識を醸成して行かなければならないのではないか、ということに気付き、市ではルールブックを作って学校で生かすことを考えました。

・ルールブックの内容

< 25のおやくそく にこにこカード >

就学前幼稚園・保育園児編／ A5版縦のカードを綴り、1枚に1つずつ約束事が書いてあります。1枚の表には子どもへの質問と保護者向けの解説が記載され、裏には答えが書いてあります。

例：

1. あいさつは あいての めをみて げんきよく
2. 「いただきます」かんしゃをつたえる だいじなことば
3. 「ありがとう」うれしいきもちが ふくらむね
4. かおをあらえば すっきり しゃっきり いいきもち
5. ようふくは じぶんできようね シャツいれて



< 39ルール >

小学校低学年編／ A5版縦で、見開き（A4横）に1つずつ、都合39のルールが書いてあります。

例：

1. きょうも一日元気よく／ おはよう！
2. 食事のあいさつ／ 「いただきます」「ごちそうさま」
3. やさしくしてもらったら／ ありがとう
4. 失敗したら・・・まちがえたら・・・／ ごめんなさい
5. 持ち主はだあれ？ ／名前を書こう



< 33の約束 >

小学校高学年編／ A5版縦で、見開き（A4横）に1つずつ、都合33の約束事が書いてあります。

例：

1. 進んであいさつをしよう！
2. 感謝の気持ちを伝えよう！
3. 自分がわるいときは、素直に謝ろう！
4. ものを大切にしよう！
5. 時間を守ろう！



< 毎日の約束カレンダー >

中学生編／ A5版横で、1から31までの見開き（A4縦）で、一日の約束事が書いてあります。

例：

1. あいさつをしっかりしよう
2. ものを大切にしよう
3. その場に応じた服装、身だしなみで生活しよう
4. 学校生活に不要なものは持ってこない（身につけない）
5. 気持ちのよい返事やていねいな言葉で受け答えをしよう



いずれのルールブックにも、「ならぬことはならぬものです」という副題をつけています。

これは江戸時代に、会津藩の子ども達が 10 歳になると日新館という藩校に入り「什の掟」という約束事を学びました。その最後に「ならぬことはならぬものです」という一文があり、現代の教育にはこれが欠けているといわれているので、これを取り上げています。

・ルールブックの活用

学校では、道徳の時間、朝の会、終わりの会、学級活動など、様々な機会を使って、子ども達に教えるようにしています。

道徳の時間では、県の副読本とあわせて活用しています。

幼稚園・保育園など、未就学児に対しては、園内だけではなく、ご家庭で保護者の方がこれを使って子ども達に話ができるよう配慮しています。



・所感

家庭の教育力が低下しているといわれる現代では、この程度のことは当然知っているだろう、では済まされないのなら、学校で改めて教えなければならない、ということですが、その通りだと改めて思いました。

未就学時から中学校に至るまで、1回きりではなく継続して、かつ年代に応じて内容を変化させながら教えて行く姿勢にも、習うところがあります。

また、学校で教えて終わり、という訳ではなく、小学校でも週末の宿題や夏季休暇の課題で家に持ち帰らせるなど、家庭でも内容を共有できるように工夫して使っていることも、評価に値すると思いました。

(2) 伊丹市立図書館 ことば蔵について

伊丹市は、旧図書館に移転、新築を行い、新しく出来た図書館に「ことば蔵」という愛称をつけた。

ことば蔵は、従来に比べ図書館機能を強化するばかりでなく、館内に設けた交流フロアを拠点に市民が参加する運営会議を設置し、以後市民の自由な発想による企画を実施し、人々の交流の場としての機能をもたせるようにした。

・開館までの流れ

手狭になった旧図書館（伊丹市千僧）を移転、新築することになり、平成 18 年 9 月に「社会教育施設（新図書館）等整備基本計画策定懇談会」へ諮問、19 年 5 月に基本計画を策定、パブリックコメント・地域懇談会・基本設計・実施設計・議会議決等を経て、22 年 12 月建築工事契約、24 年 3 月竣工、24 年 7 月に開館した。



・基本コンセプト

誰もが気軽に訪れて交流することができる『公園のような図書館』

1. 図書館機能の強化
2. 人と人とがふれあい、語り合い、学べる交流機能
3. 江戸期の酒蔵や町家が残る「伊丹郷町」をはじめ伊丹の歴史、文化を発信・体感する機能

この3つを基本機能として持たせる。

・施設概要

所在地：伊丹市宮ノ前3-7-4

構造：地下1階・地上4階建、 述べ面積 6,194㎡

- 1階／交流フロア、ぎょうじのへや、多目的室、ギャラリー
 - 2階／児童書コーナー、伊丹作家コーナー、雑誌・新聞コーナー
 - 3階／一般書コーナー、情報交流ルーム
 - 4階／研修室、会議室
- 地階／多目的室、児童書庫

事業費： 2,312,000千円（うち建築工事費 1,952,000千円）

蔵書数： 開架 約20万冊、閉架 約13万冊（平成27年3月末現在）

※市内全館では 約58万冊、 参考：杉並区立中央図書館 約76万6千冊

・図書館機能の強化

<新しい機能>

- A) 自動貸出機・・・利用者が窓口を経由せず、自分で図書の貸出処理ができる
- B) ICタグ・・・蔵書管理をバーコードからICタグに変更、貸出などの一括処理が可能に
- C) 自動書庫・・・閉架書庫の蔵書を自動的に管理
- D) 不正持出防止ゲート・・・貸出手続を行っていない図書の持ち出しのチェック

<新しいサービス・運営>

- A) インターネット閲覧用端末導入・・・開放端末 10 台導入、利用者自身によるインターネットを利用した資料検索やデータベース検索が可能に
- B) データベース・・・新聞記事、法令・判例等のデータベース
- C) ヤングアダルトコーナー・・・市内高校生の参画によりコーナー運営を行い、司書とは異なる新たな視点で利用者へアピールし中高生利用者の拡大を目指します
- D) 伊丹作家コーナー・・・田辺聖子氏（名誉館長）、宮本輝氏の著書（280冊）、原稿等を展示

・市民の参加と協働

本を借りるだけではもの足りない。交流フロアを活用した「人と人とがふれあい、語り合い、学べる」交流機能を創設するために、同館では開館前の5月に市民による「ことば蔵運営会議（交流フロア運営会議）」を組織し、毎週開催している。

同運営会議は、市民に呼びかけて集まった有志で構成するもので、こんな企画をしてみたいというアイデアを出し、それを企画し、実現している。

このように企画されたイベントの開催は、年間180回ほどにもなる。

○企画の実例としては、

- ・ZINE（ジン）／各自が気軽な小冊子ジンをつくる。それは世界に1冊しかないオリジナルなジンで、館内にジン専用のラックがあり、誰でも自由に閲覧ができる。
- ・カエボン／読み終わっていらなくなった本に、自分の感想なり書評を書いたものを挟んで、専用ラックに持ってくる。1冊持って来たら、それと交換で好きな本を1冊自由に持ち帰ってよい。
- ・三余学寮／もう一度小学校の授業を受けてみたい大人向け授業
- ・ビブリオ・バトル／順番に自作の本をその内容や執筆意図などについて5分間説明と参加者との3分間ディスカッションを行い、最後に参加者が自分が読みたい本に投票してチャンピオンを決めるもの。2か月に1回開催し、毎年チャンプ大

会も行っている。

など

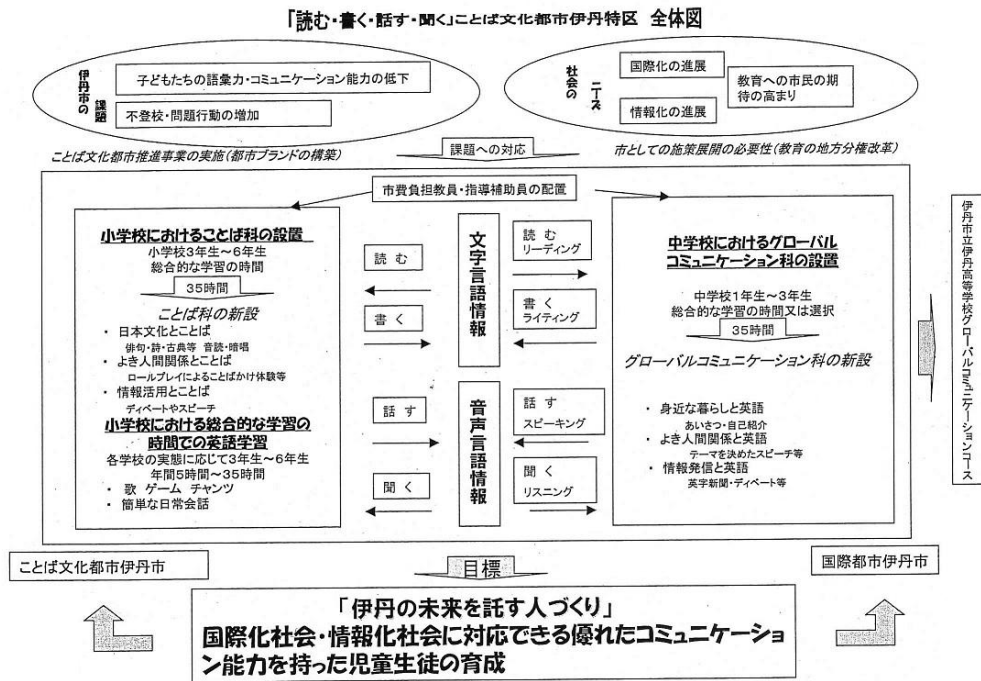
・移設開館前後の変化

- 来館者数： 約 394,000 名 (H26 年実績、H22 年の 1.2 倍)
- 貸出冊数： 約 67,800 冊 (H26 年実績、H22 年の 1.3 倍)
- 予約数： 約 65,000 冊 (H26 年実績、H22 年の 1.9 倍)

・特区としての取組

伊丹市は、「読む・書く・話す・聞く」ことば文化都市伊丹特区 として、子どもたちの語彙力・コミュニケーション能力の向上を目指している。

小学校における「ことば科」の設置、中学校における「グローバルコミュニケーション科」の設置もそのためだが、図書館もその特区の中で活躍することが期待されている。



・所感

図書館機能に関して：

1. ICタグを用いた閉架蔵書管理の自動化により、端末操作で利用者自身が閉架蔵書の請求をすることができ、閉架からの持ち出しも自動化されている（受け渡しには人が関与）ので、時間と労力の削減が出来ていることは評価される。が、杉並区中央図書館の場合の蔵書数は約 77 万冊あるので、すぐに杉並区に導入できるのか、ということには疑問を持った。
2. 参加委員の質問に対する回答から、図書館にこれまで来ない人たちに対してどうやって働きかけて行くかという視点では、ヤングアダルトコーナーの選書を高校生に行わせる、ことば蔵運営会議を開催する、など市民参画からの誘導に期待しているようにも聞こえたが、そこに参加する特定の関心を持つ人だけでなく、ひろく一般に働きかけて行く方法については、特別の決定打がないように聞こえた。
3. 一方で、「ことば蔵」という新しい試みに対して、マスコミ報道を多くされていることは、来館者数の増加に役立っている。
4. 絵本の読み聞かせが、年齢層を変え、曜日や時間を変え、毎日数コマずつ行っている。その取り組みには感心させられた。
5. 児童生徒学生のための自習室を多く提供しているのが目についた。席数が足りなくなった際は、追加して別の部屋も開放する用意があるという。

市民の参加と協働に関して：

1. 交流フロアを開放し、そこでことば蔵運営会議を開催し、参加者が自由な発想で企画を作り、実現させるというやり方は、定式化しやすい行政仕事から脱皮して、民間の新しい考えや流行、志向などを敏感に捉え、市民が参加する協働の在り方として大いに評価できる。その延長で、ここから市民発信型の伊丹の新しい文化が創出されるかもしれない。
2. ことば蔵運営会議の創設当初の2年間は、コンサルタントに委託料を支払って専門のコーディネーターとして配置し、会議の進行や運営を行ったという。やはりはじめは、このような人材配置が必要だと実感した。
3. ことば蔵運営会議には誰でも参加できるが、その参加の呼びかけは、広報紙やチラシなどで行っているという。この方法は、例えば図書館が市民を一本釣りしている訳で、関心のある人以外に広がりを見せることはない。一方で、まちづくりの視点、地域との連携を考えると、その地域の例えば町会、商店会など、地域に密接した団体とのコラボを行うという発想はないように感じた。図書館も地域（町会）の一員という認識はあるが、自治会組織との関係は「まちづくり推進課」の仕事と割り切って考えている。

